

わたしの 授業実践

～学びの動機を明確にする
国語科授業の工夫～



芽室町立芽室西小学校

教諭 松浦 諒

■はじめに

教員としての日々も、気が付けば11年目を迎えました。にぎやかな教室の中で、課題に向かって懸命に取り組む子どもたちの姿を見ると、私自身も一緒に学んでいると感じます。「うまくいく授業ばかりではないけれど、失敗も含めて、ここでの毎日が自分の成長につながっている」という思いを抱きながら、日々授業実践を積み重ねています。

さて、今回は縁あってこのように執筆の機会を頂きました。教員人生の半分を研究部員として過ごし、国語科の研究を通して授業づくりを深めてきた経験を振り返りながら、そこから見えてきたことについてお伝えします。

今回、例としてご紹介するのは、現在担任している6学年の物語教材『きつねの窓』です。もちろん、これからご紹介する内容が唯一の正解ではありませんが、実践例の1つとして日々の授業づくりの参考になれば幸いです。

■導入で作る学びの土台

授業を行うに当たり、最も大切にしていることは何かと問われたら、私は迷わず「導入」と答えます。なぜなら、この僅かな時間で、子どもたちの「やってみよう」という気持ちが形になり始めるからです。学習の土台を築く最初のステップで、何を感じ、何を考えながら教材に入っていくかが、その後の学びの深まりや活動の主体性に大きく影響すると感じています。そのため、私は授業準備の8割を導入に充てているといっても過言ではないほど力を注いでいます。

当然、教科によって導入の工夫は異なりますが、国語科の授業では、単元の最初に子どもたちの言語意識を整理する授業を構想しています。私は、言語意識を整理することが、学びの動機付けにつながると考えています。大人もそうだと思いますが、何かに挑戦するときには、必ず目的や意義を意識しながら取り組みます。子どもも同じで、授業の導入で学習の目的や意義をはっきり意識できるかどうか、その後の学び方に大きく影響することを日々の実践から感じてきました。

■言語意識を起点にした 授業づくり

学習指導要領では、小学校国語科において、資質・能力を育む手段として言語活動の充実が重要であることが示されています。十勝の各学校でも、日々様々な工夫のなされた言語活動が行われていることと思えますが、私が実践した『きつねの窓』では「ファンタジー作品の魅力をもつ魅力ナビ」で芽室町民に伝えよう」という言語活動を設定しました。これは『きつねの窓』の学習を通して培った読解力や作品への理解



学習の土台を築く最初のステップが

学びの深まりと活動の主体性を作る。



言語意識の視点は、5つあります。

- ① 目的意識 (学習のゴール)
- ② 相手意識 (誰に向けて伝えるか)
- ③ 方法意識 (どのように伝えるか)
- ④ 場面意識 (なぜその言語活動を行うのか)
- ⑤ 評価意識 (その言語活動がよいものであることを、どう確かめるか)

私は国語の授業実践を重ねる中で、これらの言語意識について、ねらいをもって明確にすることが、子どもたちの学ぶ意欲や活動の主体性につながると感じています。以下は、この5つの言語意識を『きつねの窓』の言語活動に当てはめて考えたものです。

- ① 目的意識：ファンタジー作品の魅力
を伝える
- ② 相手意識：芽室町民 (図書館に来る人) に向けて
- ③ 方法意識：魅力ナビで伝える
- ④ 場面意識：芽室町図書館でファンタジー作品の貸出し率が低い
- ⑤ 評価意識：ファンタジー作品を手
取る人が増えたか・魅力
が伝わったか

④については、町の図書館と連携し、実際の貸出し状況を調べ、ファンタジー作品の貸出し率の低さを授業の導入として活用しました。

⑤については、授業後に子どもたちが作った魅力ナビを図書館に展示させていただくことで、どの程度効果を生んだか、貸出し冊数に変化があったかなどを図書館司書の方に共有していただきました。

このように5つの言語意識を明確にし、単元の導入で共有することで、子どもたちは初めて「自分が今何を学び、何のために取り組むのか」を明確に意識しながら活動に臨むことができました。自ら考え、試し、表現する楽しさを少しずつ実感していく契機になるのではないかと考えます。

実際、このような導入の工夫を行うことで、子どもたちが目的を意識しながら学習に向かう姿が、以前よりもはっきりと見えるようになりました。このことから、単元の導入で言語意識を明確にすることの効果を実感しています。

■ おわりに

ここまで「言語意識」について拙い文章を書いてきましたが、私は国語科を専門とする教員ではありません。それでも、日々の授業の中で試行錯誤してきた経験が、少しでも読んでくださる方の参考になればうれしいです。



言語意識を明確にすることで

目的を意識して学習に向かう姿へとつながる。

を生かし、「魅力ナビ」と称して関連図書 (他のファンタジー作品) の魅力を紹介するというものです。ここで私が意識したのは、子どもたちの「学びの動機」すなわち言語意識をどのように明確にするのかという点です。